

青梅市文化財ニュース

第354号

平成29年4月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町1-684 TEL0428-23-6859）

一葉落ちて・・・

青梅市の南東部に広がる大荷田丘陵（通称）は、沢と尾根が入り組んだなだらかな地形で、雑木林の野鳥や動植物を観察するのに適した場所です。

最近、ここでもイノシシが増え、先日も丘陵内の巾2m程の車道上に、泥の付いたイノシシの足跡が入り乱れて残されていました。道路脇の土が、広い範囲で荒々しく掘り起こされ、イノシシが食べ物を探した跡であることが歴然としています。イノシシが食べ物を探しながら、泥足のまま乾いた舗装路を歩き回ったのでしょう。きれいに掃除された廊下に残されたいたずらっ子の足跡のようで、ニヤリともさせられますが、奥多摩の山間部の集落では、その被害は深刻です。畑一面が掘り返され、農作物は食べ尽くされ、石垣は崩され、車道には落石等々と、看過できない状況です。地域によっては、集落の耕作地全域を電気柵で囲む事態となり、のどかな山村風景という風情は失われかけています。

大荷田には、毎月のように足を運ぶのですが、少なくとも10年ほど前までは、イノシシの活動跡はあまり目立ちませんでした。曖昧な表現ですが、おそらく3～4年前頃から急に顕著になってきたように思います。個人的にはイノシシの痕跡について、具体的、定量的な記録を残していないため、いつ頃からどのように増えてきたかということ、こんな文学的表現でしか伝えられないのです。

こうした記録の曖昧さは、野鳥類にもあります。今から40年程前、春から初夏の青梅周辺の丘陵地では、サンコウチョウ（カササギヒタキ科）やサシバ（タカ科）などの夏鳥がごく普通に観察できました。それが今では、こうした野鳥は数の少ない珍しい存在になっています。身近でごく当たり前に見られた野鳥は、記録がついおろそかになり、姿を消してから、減少の原因や過程を追おうとしても、後の祭りということになります。今、奥多摩の山で少々気になるのが、ヤブサメというウグイスの仲間の野鳥です。林内の下藪の中に巣を作る夏鳥で、以前は鳴き声をよく聞くことができました。それが最近、少なくなったように「感じられます」。奥多摩の山ではシカが増え、林内の下藪が食べ尽くされている場所があります。こうした事態が、「もしかすると」ヤブサメの生息に影響している「かもしれない」。曖昧な仮定形の表現ですが、現在のシカによる被害を想定していなかった

ため、ヤブサメの具体的な生息記録を残しておらず、過去との比較ができないのです。

身近な森羅万象の僅かな変化から、先々の事態を見通す自分のセンスのなさを思い知らされる度に、「一葉落ちて、天下の秋を知る」という言葉が頭をよぎります。5月は「一葉芽吹いて、天下の夏を知る」季節、身近に見られるスズメ、ヒヨドリ、ムクドリたちにも何らかの変化の兆しが、見つかるかもしれません。

(文責 櫻岡幸治)